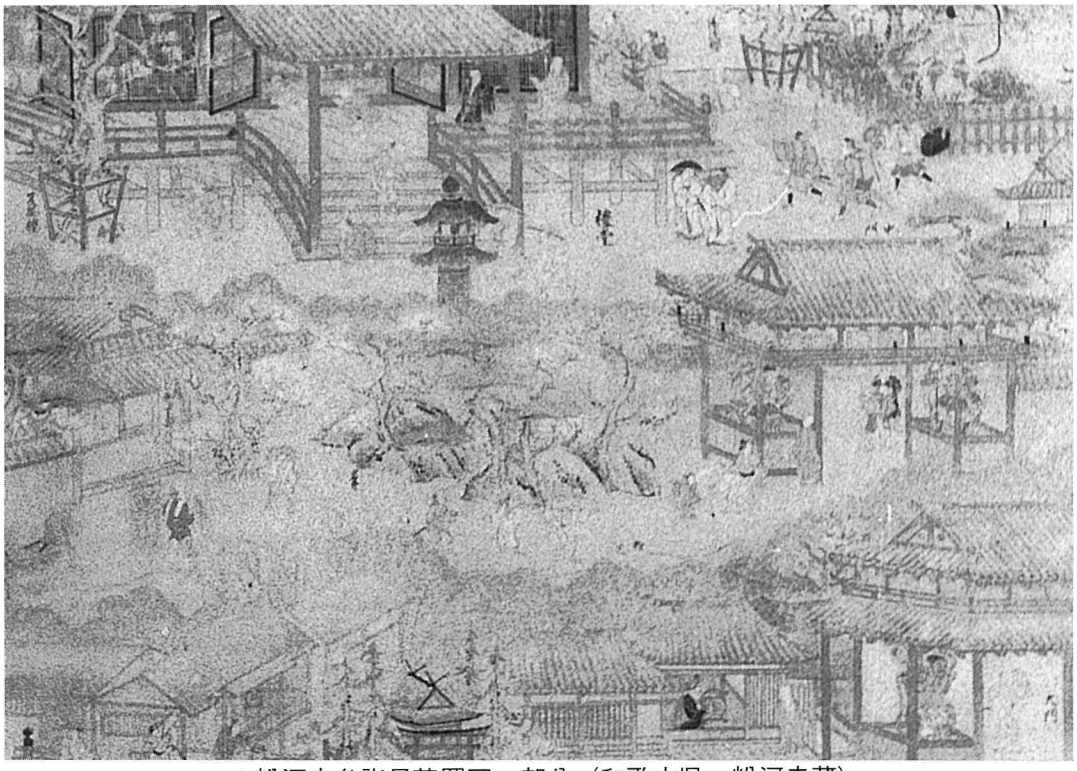
奈良県立

（通巻第64号）

民俗博物館だより

Vol. X X No. 1
1993. 8. 31



▲粉河寺参詣曼荼羅図・部分（和歌山県・粉河寺蔵）

目　次

特別テーマ展

旅 ― 巡礼と参詣 ― によせて …… 1

研究ノート

紀伊半島中央山岳部吉野山地における山の神まつりの諸相 …… 5

お知らせ …… 9

特別テーマ展

旅 ― 巡礼と参詣 ― によせて

奥野義雄

今回、企画した特別テーマ展は「旅 ― 巡礼と参詣」というテーマで、会期を平成５年９月19日（日）から11月28日（日）までの期間開催する。

今回の展示の主旨は、「旅」の中でも、巡礼と参詣という信仰的なものを取り挙げた。

あらためて言うまでもないが、「旅」は人々の生活が始まった時期からあったであろう。そして、「旅」は時代や社会の背景ともかかわっていることも確かであろう。そして、一言で「旅」といっても、様々な旅がある。たとえば、交易などにかかわる経済的な「旅」、政策・係争などにかかわる政治的な「旅」、芸能にかかわる芸人（集団）の「旅」、職人（集団）の「旅」、そして信仰的な意味合いの濃い「旅」（布教の旅、神仏の信仰・信心による旅）など、さまざまな目的や階層の「旅」がある。

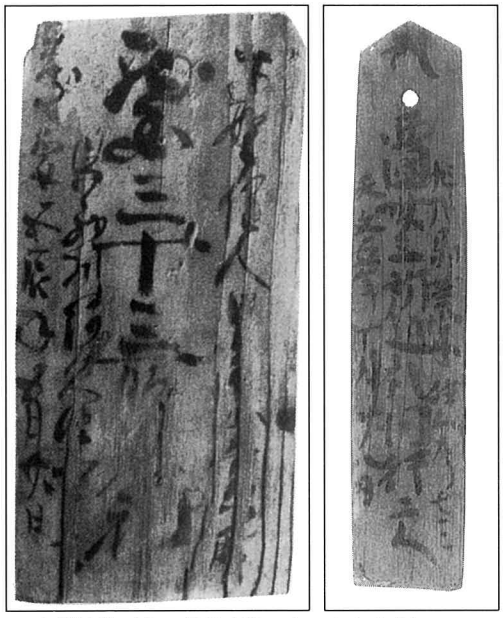
今回の展示では、巡礼と参詣にかかわる神仏への信仰・信心の旅を中心に、その旅で旅人の遺（のこ）したものから、巡礼・参詣の旅に託した巡礼者や参詣者、言い換えると祈願者（人々）の意図 ― 切望する祈りや願いが込められた信仰的意味合い ― を理解して貰うことにある。ゆえに、霊場寺院の巡礼や社寺参詣の契機をもたらした人びと、すなわち布教する側の旅を資料は今回紹介しないが、布教者について若干触れたいと考えている。確かに、今回の展示で紹介する西国三十三所巡礼の観音霊場寺院を流布させた人びとは行者や山伏であろうという想定がなされている。また、寺社参詣の内で、伊勢参詣（参宮）を促し、伊勢信仰を流布させた人びとが御師（祈祷師）であったことは確かであるが、今回の展示ではこれらの関係資料は出品していない。流布された観音霊場を巡礼する、あるいは伊勢神宮を参詣する側に焦点を当てることにした。

したがって、出品する資料は、巡礼の旅をする者や伊勢参詣する者が遺し、かつ用いたものが主である。

では、次に展示構成と主な出品資料を挙げることにしよう。

①旅の用具のコーナーでは、旅に用いられたさまざまな用具を展示するとともに、近代以前の「旅」の様子を紹介して、導入部とする。

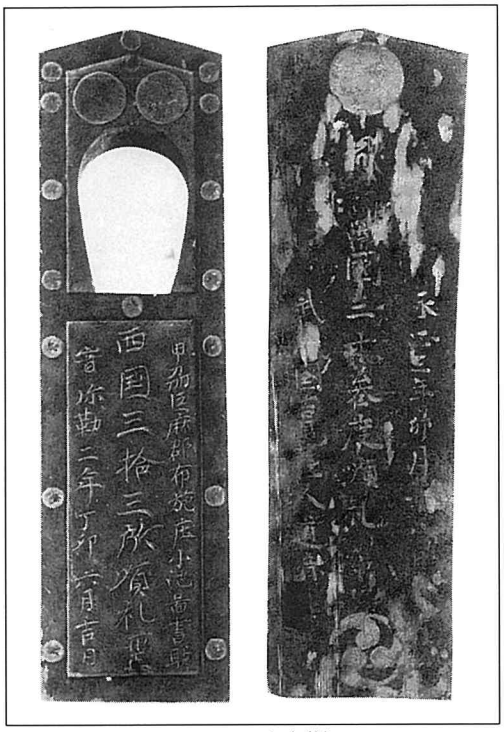
このコーナーの主な出品資料は、道中ツヅラ、トランク、旅行カバン、矢立、煙草入れ、小田原提灯などである。



▲木製納札（左―長谷寺蔵、右―当麻寺蔵）

▲木製納札（京都市・善峯寺蔵）

▲木製納札（南法華寺［壺阪寺］蔵）



▲金属製納札（大津市・石山寺蔵）

▲観音菩薩像図版木［拓影］（宇治市・三室戸寺蔵）

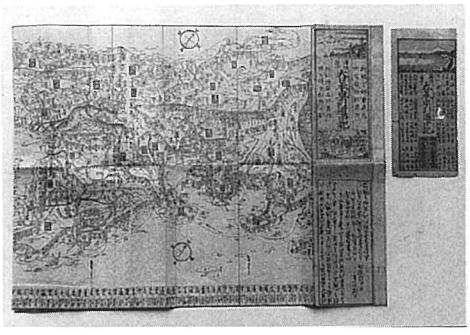
②巡礼のコーナーでは、西国三十三所巡礼の観音霊場寺院の札所に絞って、巡礼の旅をしてきた人々が「巡礼寺院（観音霊場）」に託した祈りと願いを、巡礼者が遺したもの、つまり納札（おさめふだ）（巡礼札）から、「巡礼」の旅の目的（父母追善供養など）の一端の理解に供する。あわせて、現在のような三十三所の巡礼寺院の順番が定まった時期とそれ以前の時期の巡礼寺院についても紹介していく。

このコーナーの主な出品資料は、県内・外の三十三所巡礼の観音霊場寺院の内、９ヶ寺（当麻寺、円成寺、長谷寺、南法華寺［壺坂寺］、岡寺、石山寺、粉河寺、善峯寺、三室戸寺）に遺る各種・形状の納札（巡礼札）、各寺院の本尊仏の観音菩薩像図や御詠歌や境内図などの版木である。

③参詣のコーナーでは、古代・平安時代の藤原家一門による「金峯山詣」や「熊野詣」が有名であるが、伊勢参詣（参宮）を軸に、巡礼寺院の参詣も含めて、社寺への「参詣」の旅に見る参詣者の旅そのものに対する想いの一端を紹介していく。

このコーナーの主な出品資料は、伊勢参詣（参宮）に関する道中用具や宿泊する定宿帳や講板、さらに案内書・地図や道中記などである。あわせて、寺院の参詣（曼荼羅）図も出品して、そこに描かれている旅人の様子も示したい。

以上が、今回の展示のあらましであるが、「巡礼」の旅で人びとは何を願ったのか、また

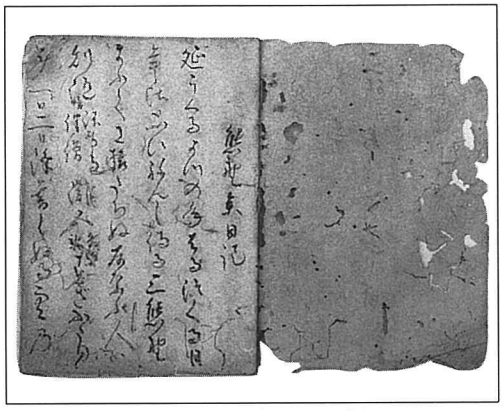


▲大日本早引道中記（松阪市立図書館郷土資料室蔵）

「参詣」の旅で人びとは何を祈ったのかを見ていただければと思っている。

▲伊勢御参宮上下道中附（平山敏治郎氏蔵）

▲道の記（平山敏治郎氏蔵）



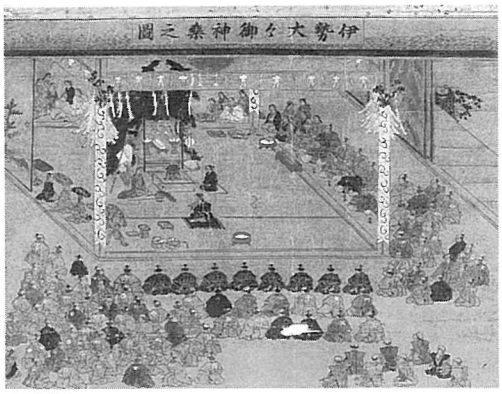
▲三熊野参詣道中記（平山敏治郎氏蔵）

特別講演会

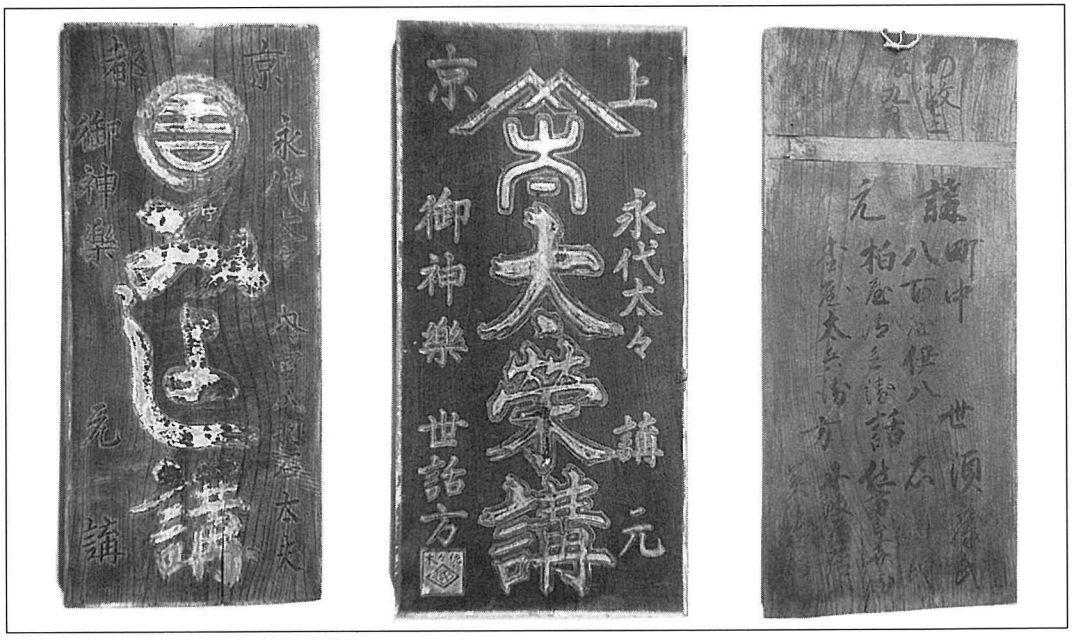
① 期　　日：
平成５年10月10日(日・祝)
午後２時から

② 講演テーマ：
道中記からみたさまざまな旅

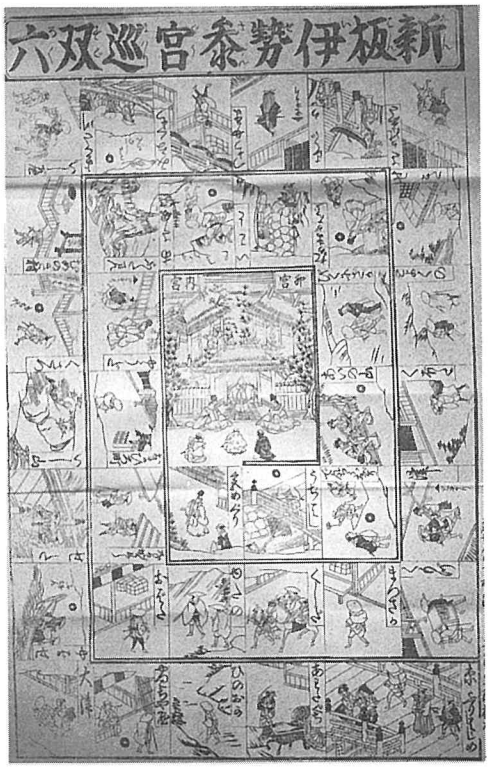
③ 講　　師：
文学博士　平 山　敏治郎 氏



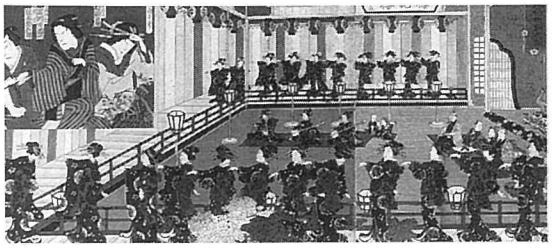
▲伊勢大々御神楽図（三重県立博物館蔵）



▲伊勢講・講板（三重県立博物館蔵）

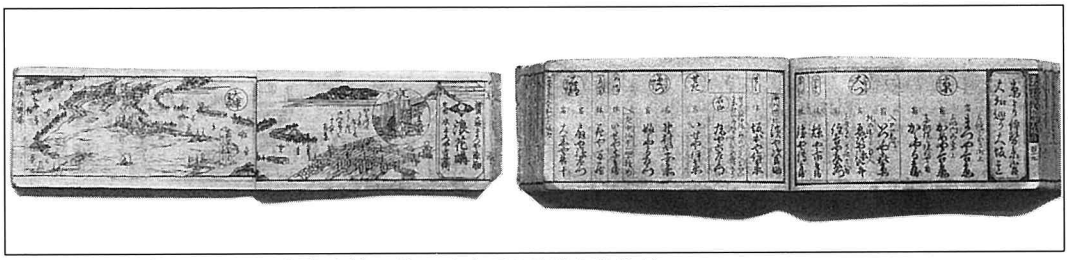


▲伊勢参宮巡双六（個人蔵）



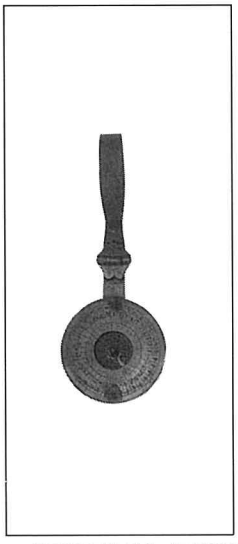
▲伊勢・左市踊図（三重県立博物館蔵）

▶道中万覚日記帳（平山敏治郎氏蔵）

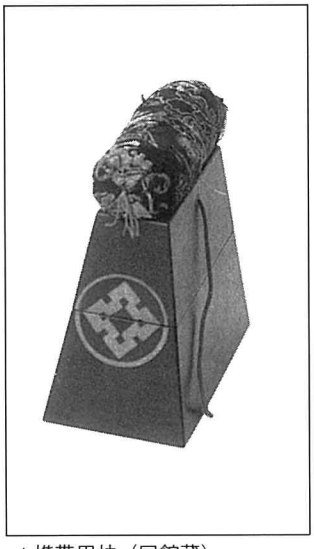


▲浪花講定帳（左）と大和巡宿附（右）（松阪市立図書館郷土資料室）

▲道中合羽（松阪市立歴史民俗資料館蔵）



▲行計［万歩計］（同館蔵）



▲携帯用枕（同館蔵）

松阪市情報コーナー図書

研究ノート

紀伊半島中央山岳部吉野山地における山の神まつりの諸相

― 山の神まつり残存資料の歴史的把握の試論 ―

浦西　勉

吉野地方の山の神まつりに関する有形の民俗資料を、当博物館に若干であるが収蔵している。山仕事の道具の模型・ケズリバナなどがその民俗資料である。

今、この民俗資料を通して、何を考えることが可能なのであろうか。つまり、この民俗資料の文化財的意味は何なのであろうか。確かにこれらの資料は、この地の人々にとって感情的（精神的）にも、経験的にもある時間的経過を持つ歴史的事実にちがいない。それらの意味を現段階においてどこまで説明できるのであろうか。

山の神まつりに関して先の「吉野の山村と伝承文化展」において、2、3ヶ所の調査を行った。調査地は、黒滝村赤滝と川上村高原・白屋であった。他に、十津川村迫西川・小坪瀬、東吉野村平野なども若干であるが行った。いったい何がわかったのであろうか。今、上記した山の神まつりに関する民俗資料と今回調査したこととを踏まえて、考えたことの一端を述べておこうと思う。

先学の民俗調査によって得た資料により、又、今回民俗調査したことなどから、吉野地方の山の神まつりはほぼ全域にわたり行われていることがわかる。つまり、各大字には必ず1ヶ所か数ヶ所に山の神をまつり、年1回～3回程、山の神まつりが行われている。この山の神まつりの特徴を大別して、次の4種類の形態が認められる。

（A）山の神まつりにケズリバナが存在する。
（B）山の神まつりに山道具の模型を作り供える。
（C）（A）・（B）のようなものは作られないが、山の神のまつりは行われている。
（D）山の神まつりは、イノコ、あるいは弁天まつりと同じまつりとなっている。

（A）～（D）は、地域的にほぼ図1のような概念図が描ける。特に林宏氏の『十津川村史』・『下北山村史』、宮本常一氏の『吉野西奥民俗採訪録』、岸田定雄氏の『天川村史』・『黒滝村史』・『大淀町史』、また川上村・天川村・野迫川村の緊急調査報告書などで確認できる。

これらの調査によって、又、その上に調査を重ねて、この地方の山の神に関する研究が進められようとしている。私なりに目についた研究の第1にあげることができるのは、林宏氏のものである。『十津川』の中に、「山ノ神信仰と山での禁忌」という報告と若干の考察があり、示唆に富む。次に保仙純剛氏の『奈良県綜合文化調査報告書吉野川流域』（昭和29年）の「山の神とそれにまつわる伝承」がある。そして次に松崎憲三氏、『国立歴史民俗博物館研究報告　第7集』に「山の神祭りにおける木製祭具の研究」がある。山の神まつりという民俗行事を問題とし、それぞれ主題とするところは少しづつ異にするが、この地の山の神まつりの研究の重要な問題点が述べられている。この地方の山の神に関する研究は深化しつつあると思われる。

ここで検討したいことは、当初に述べたように当館に収集した山の神まつりに関する資料を通して、吉野地方の山の神まつりの意味は何なのか、又、それに関する伝承やケズリバナや山道具の模型の意味は何なのか、そのような問に対して答えるための基礎的概念を述べてみたいのである。先に述べたように吉野地方において、山の神をまつる風習の無い村は存在しない。どの村でも、山の神のまつりが存在する。いったい、いつから存在したのか、その始源はいつか。又、その変遷はどのようなものであるのか。そして、その山の神まつりの宗教的、社会的意味は何なのか。このように、歴史学的、宗教学的、社会学的関心によって山村に住む人々の精神的側面を考察することの可能性がありそうに思える。

今、ここで試みるのは歴史学的試みである。もちろん、歴史学的なものがすべて独立しているのでなく、宗教学的、社会学的にもすべて関係するのであるが（だからこそ、民俗学

的考察という立場を取るのであるが）、主にという意味で歴史学的に考えてみるのである。

最初にもう１度、今日の山の神まつりの形態について述べておこうと思う。山の神のまつりについて、１個人が感じる山の神と、集団・村落社会が共同で認知している山の神とがあり、今、問題にしているのは後者である。しかし、個人と社会とが簡単に別々に区別できるものではないことは当然である。外から観察できる集団で行う山の神まつりについて、今、問題にしようとするのである。先に(A)地区・(B)地区・(C)地区―１・(C)地区―２・(D)地区の概念図を作ったが、その順に事例の報告をしてゆくことにする。

（A）十津川・上北山・下北山村の山の神まつり

報告１．十津川村迫西川の山の神まつり

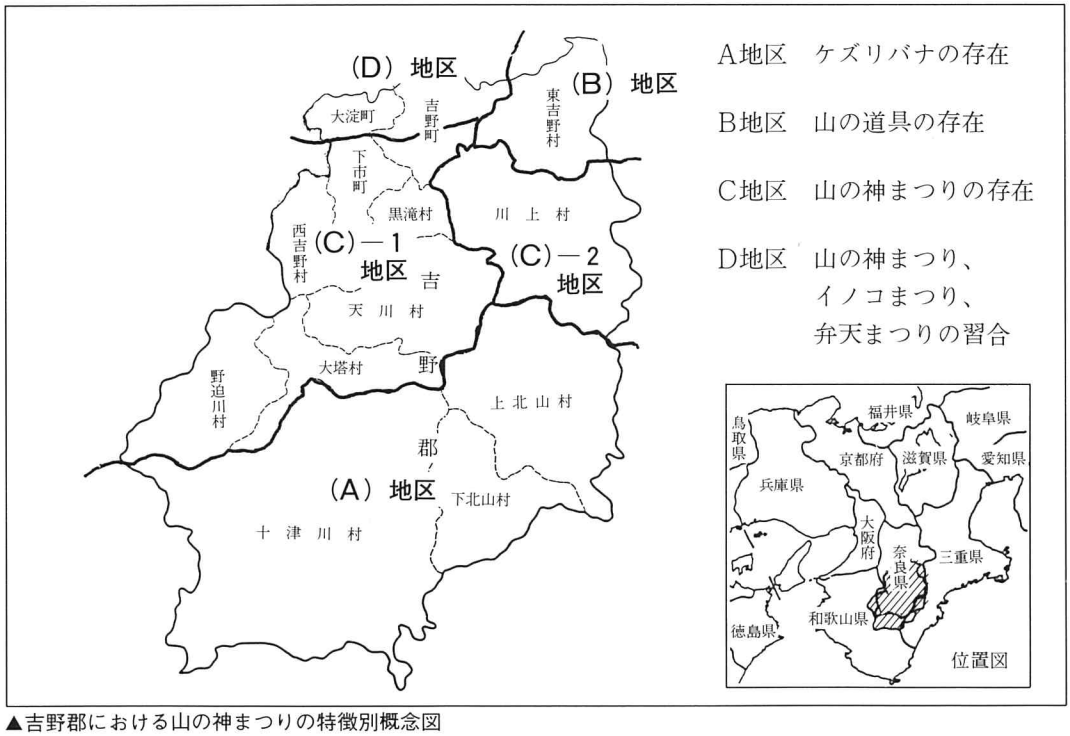
11月７日（今は一月遅れて12月７日）が山の神まつりで、シメナワをこしらえ、御幣を切って、７つの団子とオミキ・サカナ（サンマ）・塩を供える。７つの団子とは、御飯を炊き、スリコギですってにぎり、小豆の餡を付けるオハギである。山の神さんは１ヶ所ではなく、１軒で祀る山の神、２軒で祀る山の神などがあり、大抵木が山の神さんである。木の種類は桧・杉・松・樫の木が多い。山の神さんで、１番多人数でまつっているのはダイジョーグン（ダイジョーゴー）さんと山の神さんを一緒に祀っているところである。ダイジョーグンのまつりは12月23日で、この日と山の神の日に当屋の人がサカグシ（カザリバナともいう）を１対ずつ作りダイジョーグンと山の神に供える。サカグシとは、５寸か６寸の木を上の方から削ったものである。

まつりの後、餅まきをする。

報告２．十津川村小坪瀬の山の神のケズリバナ

山の神まつりは毎年11月７日にする。近くの人２、３軒で各地でまつっている。多く樫や楢の木である。最近家の近くに山の神をまつった。その時にも、ケズリバナを作った。山の神を最初にまつる時、ケズリバナを一対作り、供える。その時、７つのボタモチ（小豆団子）・サカキ・サケ・果物・洗米を供え、シメナワを飾る。

（田中功氏談）



▲吉野郡における山の神まつりの特徴別概念図

（その特色）

1．ケズリバナ（サカグシ・カザリバナ・カンザシ）の存在。

2．村落内にいくつかの山の神が存在する。例えば、垣内・家ごとの山の神が存在する。（出谷殿井では、以前は1軒ごとに山の神の木を持っていた［林宏氏『十津川』］。上北山村小橡では、カイト山のほか、家にも山の神をまつっていた［『上北山の民俗と自然』］。）

3．ケズリカケは毎年作るのではなく、初めての山の神をまつる時に作るところもある。（出谷小壁では、以前には山まつり［山仕事を始める時のまつり］の時作り、山小屋の棚に2本供えて拝んだ。［林宏氏『十津川』］）

4．野迫川村弓手原のオコナイのケズリカケの存在。

（B）東吉野村は、山の道具の模型を作る。集団で行う。（例：東吉野村木津川・小栗栖・滝野・平野、川上村瀬戸）

報告3．東吉野村平野

1月7日早朝、山の神の祠に平野の各垣内の人々が参る。当屋の家の人が山の道具模型を作り、これを山の神の祠の前に吊る。山の道具とは、キンマ・カマ・ノコギリ・ヨキ・1本梯子などで、その他、タイ・ユミ・ヤ・などを吊る。

（C）この地域は、大塔村・天川村・黒滝村・下市町にあたる地域と、川上村とによって差異が認められるので、前者を（C）－1、後者を（C）－2としておく。この地域の山の神は特徴的なものが見られないためか、余り報告がなかった。今回、2ヶ所山の神を見学したことを報告しておくことにする。前者(C)－1地域は、次のとおりである。

報告4．黒滝村赤滝の山の神まつり

（「奈良県立民俗博物館だより」通巻63号参照）

報告5．川上村白屋・高原の山の神まつり

白屋の場合、山の神さんは神社と同じ境内にておまつりされており、1月7日・6月7日は山の神の日で、山関係の仕事をする人々が参る。特に、数軒で山の神の講があり（多くは山守りの家）、この人達により酒がふるまわれる。この日、山の神まつりが終わってから、寺で般若経転読をする。

高原も同様1月7日と6月7日が山の神まつりで、前日から餅搗きが行われ、当日7時頃から垣内の当番が準備をし、ノボリを立て、トンドを焚き、村人が集まるのを待つ。7時30分頃、村の六人衆の祝詞があり、それが終わると談話しながら約1時間、酒を飲み、最後伊勢音頭を唄う。その後、山の神さんの前で餅まきをする。終わったのが8時40分であるので、約1時間半である。女人の入ることを嫌うようだ。

川上村の山の神の場合、1月7日と6月7日の2回行われ、山仕事に携わる男子が参る。女性の姿は全く見られなかった。山の木を倒す最初の日、木を倒したところにお神酒と塩と洗米を供える風習もある。

（平成3年1月7日白屋調査）

（平成3年6月7日高原調査）

確かに山の神まつりの形態に特徴的なものはみかけないが、多くは山の神を村落の1ヶ所にまとめて当番を定めて村人が祝詞をあげて、餅まきをする場合が多い。又、山林業の事業主が主体になって行う場合もある。（C）－2地区とした川上村においては、形態が（C）－1地区と同じであるが、山の神まつりに女性が参加しないなど、

▲山の神まつり（川上村高原）

山の神というものに対する禁忌が強いように見受けられる。

（D）大淀町・吉野町竜門地区では、イノコ・山の神・弁才天との習合がみられる。この地域では、11月か12月にイノコまつり・弁天まつりが山の神と同じ意味で行なわれている。共通性は、山の神さんの祠の一所に大木や岩などがあり、女の神さんといい、この日は休日で、山の中に入ると良くないという。又、祭典後決まって餅まきがある。

以上、地域別特徴と共通性を示したのである。その中から、当館収蔵の山の神のケズリバナ及び山の道具の模型が特徴あるものとして残存することになる。

さて、先に述べたようにここで考えてみようとするのは、この地域的な山の神まつりの歴史学的把握の問題についてである。一応、この地域に限定して、まず、把握しておきたい。もちろん、私達は、山の神まつりが何も吉野地方に限らず東山中・伊賀地方・滋賀県にかけて様々な諸相を持つものが存在することを知っている。が、ここで考えているのは、吉野地方とそれらの地方とを短絡的に概念化することの危険性を感じることである。

今、私は次のような試論を提出してみようと思う。これは、言葉で表現することが難しいので、図によって表現してみようと思う。山の神の何たるかは解明できないが、それをまつる精神や経験（形態）の量は、私はきっと始源から今日まで余り変わらないと考える。そして、まつる経験（形態）は近年になればなる程、内容が込み入って表面に現われてくると考える。それを表にして、始源の第1期から第4期までをこの地域は歴史的経験をしていると考えるのである。

第1期

最初に現われる山の神のイメージは、個人の精神・集団の精神のほとんどは形として残らない側面であるため、今、多くのことは原始宗教的な宗教学の研究分野にゆだねる必要があるが、今これを第1期山村の山の神に対する思考形態とみて、きっと始源にはそのような山の神まつりが存在したと考える。

第2期

その次に現われる山の神のイメージは、畑作との関連によって現われてくる。それには、次のいくつかの伝承によっている。

＊山の神は狼であるという伝説
畑を守ってくれる獣は狼で、畑を荒らす獣を追い払ってくれる（十津川村高滝）（田口重晴氏談）。

＊最初に開墾したところをまつる風習
山の神をまつるには、山仕事や畑を開いた場所に最初にまつるという伝承（十津川村）

＊焼き畑的に開墾した集団によりまつる。
家・垣内毎の山の神があり、まつることになるのは、それを暗示している。
何軒かで山の神をまつるというのは、山で焼く畑の作業をした集団のまつりという意味があると考える。

▲吉野地方の山の神まつり残存資料の歴史的把握図

（凡例）①〔　　期〕□内の文章は山村社会の主流をなす思考形態を示す。②●印は資料の歴史的位置を示す。

などである。これは例えば（D）地域の、イノコまつりや弁財天まつりのイモを使ってまつりが行われる風習とも関連がありそうに思う。イノコまつり・弁財天まつりは、このような畑作・焼き畑的思考形態の残存であると考えるのである。

第３期

ケズリカケや山の道具模型の存在は何を意味するのか。これらは、畑作から進んで、より高次の畑作か、又は木を加工する技術の現われ方と関連がある。故に第２期より進歩した山の神まつりの時代の位置におく。ケズリカケを作る最大の関心事は、いかにうまくきれいに削れるかである。これには、相当進んだ刃物の存在がなければならない。山の道具の模型についても、その細工がいかに上手なものであるかを競い合うという要素があり、刃物の存在に重要な意味があると思う。

第４期

基本的に、近代日本社会の思考形態と同じレベルの山の神のイメージであると思われる。この近代日本社会の思考形態の説明をしなくてはならないが、概念的ではあるが、次のように説明しておく。日本の場合は稲作中心的思考形態が発達すると同時に、稲作社会を母体とした商業的・経済的な部分が飛躍的に増大した社会一般をそう呼びたい。稲作を基本とした社会が一方に存在しており、そちらの方の山の神のイメージもあったであろうが、吉野地方の場合、畑作を基本とした社会であり、日本社会は平行して山の神まつりが発展してきたと考えている。そして、日本の近代社会は稲作優位の社会である。

（D）地域の場合、まさに奈良盆地などの稲作地域の山の神のイメージと山村の山の神との習合の歴史的経過の歩みと判断されようと思われる。又、（C）－１地区・（C）－２地区も、林業という形式は稲作とは異にするけれども、その林業の成果物である杉・桧の材の用途のほとんどが稲作中心社会の用途である点、同一レベルと私は考えている。

又、今まで、民俗学が考えていた山の神の秋の去来説は、この稲作社会の地方にあてはめられる理論のように考える。

このように吉野地方の山村の山の神に対する歴史的な編年を考えてみた時、４期に分けてみることができると考える。

上のように見た場合、山の神のケズリバナや山の道具の模型などは第３期に位置し、その時代の思考形態の上に立って、この民俗資料の考察を深める必要を感じている。つまりこのケズリバナという資料は、私達にちがった価値感の持つ社会の存在を知らせてくれる。吉野の山村において、第１期から第４期までの民俗社会を研究しなくてはならないのであるが、今、そのための資料として、山の神まつりの資料の存在を認めたいのである。この民俗資料から、私達は様々な歴史的な話を聞くことができると信じている。

●民俗博物館展示ご案内

【特別テーマ展】
旅 ―巡礼と参詣 ―
〔期　間〕
平成５年９月19日（日）から11月28日（日）

【特別講演会】
〔期　日〕
平成５年10月10日（日・祝）　午後２時から
〔テーマ〕
道中記からみたさまざまな旅
〔講　師〕
文学博士　　平 山　敏治郎先生

常　設　展

大和の生業

(1) 大和の農村のくらし　稲作・大和のお茶
(2) 大和の山村のくらし　山の仕事

●博物館ご利用のてびき

開館時間　館内　午前９時～午後５時
（ただし入館は４時30分まで）
民家　午前９時～午後４時
（博物館および民家の見学所要時間は約１時間30分）

観 覧 料　博物館

	大人	学生	小人
個人	200円	150円	70円
団体（20名以上）	150円	100円	50円

※入園および民家見学は無料

休 館 日　毎週月曜日
（その日が休日のときは翌日）
年末年始（12月28日～１月４日）

奈良県立民俗博物館だより Vol. X X No. 1　１９９３年８月31日発行
編集発行　奈良県立民俗博物館　〒639-11 奈良県大和郡山市矢田町545　☎07435③3171（代）　印刷 吉 岡 印 刷